備陽史探訪
第55号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

「備後古城記」について

田口　義之

郷土史の講演会などでよく質問されることの一つに『備後古城記』の史料性があります。つまり、同書に書いてあることは事実かどうか、信用できるのだろうか、ということです。

『福山市史』上巻は、同書を「戦国時代末期にはその初稿が書かれたと思われる」として極めて高い評価を与えていますが、最近では全く信用できない書物だと酷評する人もいます。

この『備後古城記』に対する極端な二つの評価は、同書の成立の過程と、写本の多様性に原因があると思われます。

同書の成立は、近世幕藩制の確立と密接なつながりがあります。幕藩制は大閤検地によって確定された近世郷村制を基盤に成立していましたが、この郷村制は農民の〃自治〃を立て前としており、藩の支配は間接的なものでした。各郷村は定められた年貢を納めさえすれば、村内の行政は農民自身に一任されていたのです。

ここに『備後古城記』が成立する一因がありました。つまり、直接支配を放棄した藩側では各郷村の現状を知るために村々から報告書（差出帳）を提出させましたが、この差出帳には重要な一項目として〃古城跡〃の有無が記されるのが通例で、各村々の差出帳の村内古城跡の項目のみ抜き出し、一冊の書物にまとめれば、これがすなわち〃某々古城記〃となったわけです。

備後の場合、この古城記を戦国時代末期に逆上らせるのは少し無理があるようですが、近世前期の水野・浅野時代には原本が成立していたのは確実です。水野氏の時代の原本は残っていませんが、『水野記』（県史所収）や流布本『水野記（一代記）』などにはすでに「御領分古城主」として原『古城記』と思われるようなものが載っており、福山領以外の備後地域（芸州領）にもこのようなものが存在したと推定され、福山藩領、広島藩領のこの種の書物を合わせれば、いわゆる『備後古城記』が成立するわけです。

しかし、この原『備後古城記』は極めて簡単な内容だったと思われます。村差出帳の記載は、宝永八年（一七一一）の阿部氏が差出させたものを見ても、古城跡の有無と、名称、城主の名前の三つの事柄が記されるのみで、城主の名前もほとんどの場合は、「相知不申候」とあって、この頃には城主の伝承はほとんど忘れられていたことがわかります。

ところが、現在福山城鏡櫓文書館に収蔵されている各種の備後古城記の写本を見ると、内容は驚くほど詳細で、もしその記述が事実とすれば、備後南部の中世史は大きく書き変えられる程、豊富な情報を含んでいます。

実を申しますと、この流布本『備後古城記』の内容の詳細さこそが、同書全体の信用を落す大きな原因となっているのです。

江戸時代中期の宝永年間には既に

毛利家文書二二五号	備後古城記（備後叢書所収本）
三吉式部少輔隆亮（たかすけ）（姓不詳）　里資	三次郡畠敷村比叡尾城　三吉隆資
長大蔵左衛門尉元信（もとのぶ）	甲奴郡上下村翁城　長谷部大蔵左衛門元延
上原右衛門大夫豊将	世羅郡甲山町　上原左衛門大夫元佐
有地刑部少輔隆信	芦田郡下有地村大谷九ノ平　有地美作守隆信
杉原越前守隆盛	御調郡木梨村鷲尾山城　木梨又左衛門尉元清
柚谷（ゆたに）新三郎元家	三谷郡棗原村　湯谷何某
高屋兵部太輔信春	神石郡小畑村九鬼城　馬屋原左衛門大夫
和智又九郎誠春（さねはる）	三谷郡吉舎村南天山　和知實春
安田少輔十郎元賢	三谷郡安田村　安田右衛門大夫
湯浅治部太輔元宗	（世羅郡伊尾村　尾首山城主）
芥川彦五郎元正	芦田郡木野山村林城　芥川庄之次郎
新見能登守元致	甲奴郡小堀村新見能登守
楢崎彦左衛門尉信景	芦田郡久佐村楢崎山朝日山　楢崎三河守元安（三河守信景とも有）
古志左衛門大夫豊綱	沼隈郡本郷村二子城　古志清左衛門豊長
田総宗左衛門尉元里	甲奴郡稲草村　永井田房亮

忘れられていた城主の伝承が、幕末（多くの備後古城記の写本はこの頃以降のものです）になって突然、城主の生没年、戒名に至るまではっきりわかるでしょうか。又、なかには城主の石高が記入されたものまであります、村々の城主達が活躍した時代にはまだ実施されていなかった〃石高制〃に基づく知行高が、何故江戸の終り頃になってわかるのでしょうか。こうした幕末期以降の〃書き込み〃がいかに同書の信用を落しているのか、言を待ちません。

『備後古城記』を研究、利用する場合、その底本は、やはり戦前、猪原薫一、得能正通両氏によって校訂、活字化された備後叢書所収本です。同所収本は、両氏の努力によって極力後世の書き込みが排除され、出来うる限り原本に近いところまで復元されています。

備後叢書所収『備後古城記』（以下特に断わらない場合、これを指す）は取り扱いさえ間違えなければ非常に優れた史料的な価値を持つ書物です。

一例を『毛利家文書』（大日本古文書）との対比で述べてみましょう。

『毛利家文書』は長州藩主毛利家に伝わった中世から近世初頭にかけての文書群ですが、この中に戦国時代中期の弘治年間（十六C半ば）の備後国人衆（いわゆる山城主達）の全貌を示す一通の興味深い文書があります。それが同文書二二五号、弘治三年（一五五七）二月二日付毛利元就他十七名連署起請文です。この文書は、当時安芸の戦国大名毛利氏の勢力下に入った備後の山城主達が毛利氏と共に軍規の厳正などを誓ったもので、署判者がぐるっと輪になって誓約した傘連判状として有名なものです。

この文書は正文ではなく写しか或いは案文ですが、毛利元就、隆元を間にはさんで十六名の備後の山城主達が誓約に加わっています（表の上段参照）。

彼等は全て備後の代表的な国人達ですが、『備後古城記』をひもとくと、ほとんど全て彼等と関連がある人名の記載があることに気付きます（表の下段参照）。

この内、姓名が全く一致するものは、楢崎信景、有地隆信の二名に過ぎませんが、和智誠春（實春）、長元信（長谷部元延）、三吉隆亮（隆資）の場合は、同一人物であることは明白でこれに含めてよいでしょう。次にその官途名が一致する者は、新見元致（能登守）、上原豊将（右衛門大夫）の二名。上原氏の場合は実名が一致しませんが、元佐（将）は豊将の嗣子であって、新見、上原両氏の場合もほとんど一致すると言ってよいでしょう。又、杉原（木梨）隆盛の場合は、他の史料によって又左衛門尉元清とも名乗ったことが判明し、『備後古城記』の記載は誤りではないことがわかります。

このように毛利家文書二二五号に署名した備後国人衆十六名の内、半数の八名が『備後古城記』にその記載があることがわかります。残りの八名についても、名字、官途名共に不明な里資（田総氏か）を除く七名の内六名は同姓の人名の記載があり、詳細に研究して行けば裏付けの取れる場合が多いと思われます。

毛利家文書の場合は一例にしか過ぎませんが、中世文書（特に戦国期のもの）に出てくる備後の国人、土豪を研究する場合、『備後古城記』がいかに有効なものであるか、これでおわかりでしょう。

但し、一つだけ注意しなければならない点があります。それは『備後古城記』の記載はその性格から全て戦国末期の、各山城最後の城主達であるということです。言い易えればそれ以外、たとえば南北朝期頃の人名等があってもそれは後世の書入れであって信用できないということです。

この点、各城主の記載は十分検討して利用する必要があるのですが、ともあれ、全て書かれたものは一応疑ってみる、という態度で史料（資料）に接すれば、そこに何らかの歴史的事実を発見できるはずです。

（参考「備後古城記とその校訂に就て」猪原薫一『備後叢書』）

姫谷焼に想う

熊谷　操子

鞆ー熊野ー芦田郡高木ー甲奴郡上下ー神石郡来見ー山野村ー備中後月郡吉井ー成羽。

このコースは、水野勝成が浪々の身であった頃に辿った一部分の足どりと聞いているが、山野村から備中へ行く前に、もしかしたら姫谷の里に足を入れたのではないかと、私は勝手な臆測をしてみた。

勝成が陶芸にも興味をもっていたらしいことを読むにつけ、きっと山の中で名も知らぬ一陶工が、焼き始めて間もない数少い作品を列べて見せ、それらをもとに焼物の話題に花

が咲いたのだろう。そして意気投合の末、

「陋屋ではございますが、是非お泊まり下さい」と、それなりのもてなしを受けたのではなかろうかと、ひとり想像逞しゅうしている。

元和五年勝成が十万石に封ぜられ、福山城主となった時、浪人当時世話になった陶工の好意に報ゆべく、その窯に大いに援助し、遂に藩窯としてとり上げたと伝えられている。

あとさきになるが、元和元年頃、肥前の高原五郎七という陶工に、柿右衛門と左門という高弟がいて、その左門がキリシタン崇拝の嫌疑を受けて姫谷へ逃がれて来たと言われている。もう一説には京都にいた陶工が、上流社会のお姫様と手に手を取って駈け落ちして来たとも言われている。

加茂町の正福寺の過去帳や墓碑には、陶工市右衛門とあるらしいから、逃亡者左門が、柿右衛門の向こうを張って名を変え、市右衛門を名乗っていたのではないかと推理する。

焼物師左門が、第二の故郷を求め、さ迷った揚句、遂にこの地に腰を据えようと決心した理由を私なりにさぐってみた。一に土。二に燃料。三に人目を避けて住む。この三つの条件を揃えた〃ヒビタニ〃に、〃もっけの幸い〃を見つけたのであろう。

赤絵の写真で姫谷焼を見る限り、貴族達が競って焼かせた王朝趣味のあの華やかな京焼らしさは見受けられない。このへき地で、陶工ひとりで土拵えから成形、絵付、焼成を行い、その一方農作業にも精を出していたというから、伝世品が少く、しかも皿や鉢に限られている所以も頷ける。（古窯跡からは手鉢、香炉、徳利、蓋物などの破片等も発掘されているらしいが）

簡単な絵模様を、写真的な単調な筆さばきで、しかも深みのある色合いで表現した作品は、まさに肥前赤絵の技法を駆使したと言えるのかも知れない。色彩が少し暗く、その上なんだか泥臭い感じのするのは、姫谷の胎土が淡黄褐色で、その上鉄分の多い釉薬を使っていたからだろうか。もう一つ素人考えをめぐらせば、追われ者としての生活環境が、識らず、識らずその作品の上に表われたのではないかとも思える。

たゞ私が今日まで疑問に思い続けていたのは、二三の作品の素朴さが、妙に古九谷そっくりに見えることである。（とは言っても古九谷にみるあの〃思いっ切り〃は見えない）

はからずも先日読んだ焼物の本に、

「九谷焼の創始者後藤才次郎が、大聖寺藩から有田焼の陶法を学びに出張を命じられた」とあった。肥前の磁器の技術を導入しながら、京焼の賦彩法をとり入れて古九谷の世界を形成して行ったともある。

また別の本に、

「九谷と有田で、ボディを互いに多量に送り合って絵付けのし合いをしていた時代があったらしい」とある。古九谷の絵師の世界と有田の画工の世界をミックスさせて、徐々に独特な焼物の世界にと移行し始めた時代ではなかったかと考えてみる。事実、有田の二三の古窯跡から古九谷素地に極めてよく似た破片が発掘された報告があるらしい。

「こんなに深い交流があったのか、そうだったのか」と、くすぶっていた疑問が、ようやく解けて、胸のつかえがスーッと下りた気がした。

「何故」「どうして」という、なにがしかの疑問を持っていると、それが解決出来た時の識り得た喜びは極めて大きい。だから自分の内に潜んでいるマグマを、いつもたぎらせていたいと思っている。折角授かった人生の、その真只中にいるのだから。

熊谷　操子

血圧の頂点からの果たし状
方言を塗って都会へ媚びている
盃の自分の呻き飲み干しぬ
迎え撃つ言葉も用意した敷居
他人ごとに思った齢がここへ来た
自腹切る驕る自分にハッとする
しごかれてしごかれて琴弾いてます
一行でよし後悔のない日記
病人の美顔さわればこわれそう
バーゲンに構える臆病なる財布

九月例会で、出内先生から

「姫谷の元の地名は〃ヒビタニ〃であったらしい」とお聞きして、その〃ヒビタニ〃の響きがとてもユーモラスに聞こえ、可愛いくて、面白くて、ついついつられて、私めの貧しい拙い〃姫谷焼考〃を書いてみました。

訃報

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため
掲載できません。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます

一九九二年

西播磨の探訪

小島　袈裟春

○永富家

文政五年（一八二二年）に完成したと云う母屋は、元の家を取壊しての再建なのであろうか、分かり切った事を、と云うむきもあろうが廻りを見渡せばすぐ分かる様に、ここは揖保川の氾濫原なのである。説明書にも村の場所が度々変った証拠があると書いてあった、だが蔵の中には母屋より十五、六年古いものがある様だから、元の場所なのではあろう。そしてその事は信頼の置ける堤防が出来て居た事を裏付けるものでもある。

大戸口を入った所の吹抜け天井の二抱えもありそうな梁の木組みには圧倒されそうな迫力があるが、まあ大体江戸期の地主、庄屋には共通の特徴でもある、私しが興味を持ったのは厚さ五寸、高さ二尺余と、鴨居と欄間を一体にした様な材木が各部屋の上部を仕切って居た事である、始めは軟弱地盤の不等沈下防止策、と思ったが、この家には壁の部分が全くない事と考え合せると、水害対策が主目的と推定される。説明者は「皆様の家と何が異なるか比べて見て下さい」、とやゝ得意気だったが、建具や畳を取払えば、これは古代の高床家屋に一変する、少々の浸水など物の数ではない、冒頭の疑問と考え合せ、川の利用「水運」を重視した歴代の智恵と私しには思われた。……土間から上った帳場と覚しき部屋の天井に逆丁字形の木が取り付けてあった、横に居たK氏が「槍掛けですね」、と云った、私しはまさか、苗字帯刀御免でも武家ではないし、槍までは、の気持といやいやさにあらず、が交錯して質問して見た、説明者は私しの意途を察したが如く「火の用心ですよ、鳶口などの掛具です、後で陳列館を見て下さい」と軽く替された。しかし皆が旧暦の講議に聞き入っている間に一人で陳列館を覗いたら、十字形の鞘を付けた、短穂の槍が数本、展示してあったし数挺の鉄砲までちゃんと並べてある、K氏の鋭い直感に改めて感じ入った事であった。……陳列館にはもう一つ興味深い物があった、それは「家訓」（定）で、一般的な教訓を並べた中に……三十才以前の他出遊行を禁止する……内容の項目が見える、現在の家で子供を大学に入れたばかりに後継者を失う事態と考え合せ、昔も今もの人情の機微が面白かった。

○龍野の城下町

先ずは御城から……この考えはまずかった。城跡の文化資料館は展示品も多彩、豊富で楽しかったが、昭和五十四年建設と云う「御殿」はありゃ何んだ、お金を掛けて只建てました、と云う丈で構造的に、美術、博物の展示にも講演会場にも使いにくい、まあ後百年も経てば当時者の手前勝手、阿呆加減の象徴としての見世物にはなると思うが、せめて結婚式場に使える様にすれば良かったのに。余り変なものを見たので、気分を変え様と一人で、時間を気にしながら聚遠亭への道を辿った、未だ紅葉の季節ではなかったが、心字池に差しかけた数寄屋風の建物は京風に如何にもきゃしゃで趣きがあった、隣りにも茶室があって、ここで濃茶の一服はさぞかし風情があろうと思うのだが、何故か喫茶は出来ないのであった。

古代の有名人、野見宿禰の墓への道の案内板は全く見当らなかったが、赤とんぼ碑の前に来たら、童謡のメロディーが流れ出した。宿舎の赤とんぼ荘の山にも同じ装置がある、これは良い思い付きだ「御殿」の発想とは雲泥の差で、同じ街とは思えない位だ。宿舎の赤とんぼ荘は結婚式で大賑わい、ここで結婚した夫婦はきっと心豊かな家庭を築き上げる事であろう。「幸わせにな」、一寸気取ってつぶやいて見た。

龍野市は何んと云っても赤とんぼの街だ、三木露風こそ市の象徴となるべきと思う。その意味で露風館を見落した事が残念でならない。

○斑鳩寺

播磨国には太子寺と呼ばれる寺が二ケ所ある、加古川市の鶴林寺と太子町の斑鳩寺である、特に後者は推古十四年（六〇六年）勝鬘経及び法華経の講議を受けた天皇が播磨国の田地百町を聖徳太子に贈り太子はそれを斑鳩寺（法隆寺）に施入した、と日本書記に記された所に推定される。以来其の管理拠点としての財力を基に寺が栄えたであろう事は想像に難くないが、元々この地は物部一族の地であって守屋を亡ぼして後天皇領としたと私しは考える。戦乱で得た物は戦乱で失う、天文十年（一五四一年）の焼亡は、仏典通りの因果応報と考えられなくもない。

後再建されて天台に変った。……さて堂塔の配置を見ると、仁王門を入って右に三重塔、左に聖徳殿（金堂）正面に講堂と一応、法起寺式の伽藍

配置であるのは、焼失前の再現であろうか、アンバランスに見える八角円堂は明治末年の増築との事であった。

御本尊の聖徳太子像は頭部に髪を植え、布の衣服を着け、笏と香炉を持って居るが、この形式の太子像は中世以降の流行で髪と衣服が実物と云う点で、かなり後世の作と私しは思う。……宝蔵庫内は鎌倉期以降の物が多いが見ごたえはある。又庫内に置かれた、二十五菩薩面は未だ充分使用に耐えると思ったので聞いて見ると、記録面ではほとんど使った事はない、との事であった。

帰りがけ、窓口に寄ったら僅かの御守りと絵葉書だけで閑散として居たが、若くて美しい女性だったので、私「資料になる様な本はありませんか」

彼女「そう云うものはありません」

私「寺の門前に祭り堤灯が飾ってあるけど何んの祭りですか」

彼女「この寺の祭りではなく、ずっと北の神社の祭りです。」

私「門前にあるので寺の祭りかと思った」

彼女「寺の祭りは二月で、その時は人出で賑わいます」

私「寺の檀家は沢山ありますか」

彼女「少ないです」

私「普段の参拝者は多いですか」

彼女「少いです」

私しは四百円の絵葉書を求めてそこを辞した。

一寸こだわる様だがあの菩薩面は活用すべきと思う、秋の彼岸頃、二十五菩薩の行道祭、現世御利益と物部守屋の鎮魂を兼ねて。

仁王般若の読経の中、静々と散華を播きながら、渡り橋を往復する菩薩達。御利益はきっと多いと思う。

若き僧よ、実行に踏み切ったら如何…天台と檀家の協力を得て……。

合掌してバスを見送ってくれた僧の姿が有難く又いとおしかった。

○書写山円教寺

開祖性空上人は貴族の出身で幼い頃、すでに法華経を暗記した、と「今昔物語」にある、上人に帰依した花山上皇が絵師の延源に命じその生前の姿を画かせた（と私しは推定）絵を見ると、伏目勝に人を見る様子は、ギリシャ神話のトロイア攻撃軍の参謀、オデッセイアのイメージにぴったりで、仲々他人に本心を見せぬ人と見受ける、上人は円教寺が栄えて来ると更に山奥に入って、世を終えた、とあるがそれこそ神秘性を保つ最良の方法と、充分認識しての行動であろう。

私しは円教寺の興隆は、花山上皇の肩入れが大きな力になった、と考える。十九才の時、最愛の女御、忯子に死別した悲歎の中で、右大臣藤原兼家の策略に会い、皇位を失った上皇が、錯乱から仏門に安定し、その興隆につくした四十一年の生涯に、私しは限りない共感を覚えるのである。

開山堂右手にある和泉式部の歌塚と云う石塔と、式部が上人に送った、

「暗きより暗き道にぞ入りぬべき
遥かに照らせ山の端の月」

と云う和歌とはどんな関係なのであろうか、塔の陰刻によれば、式部没後三百年近い後のものだが……。

寺の伝承では性空上人に面会に訪ずれた、一条天皇の中宮・彰子の供の中に式部が加わって居た、としてあるが、彰子が書写に来た事は今昔物語にさえ記されて居らず、大体式部が彰子に仕えたのは上人死去の翌年以降の事であって、有名寺院の伝承としては如何にも御粗末である。

しかし「和泉式部日記」の校訂者、清水文雄氏によれば、勅選和歌「拾遺集」に載るこの歌は、法華経化城喩品を下敷にしたもので「播磨の聖に結縁のため」と明記してあり式部二十才頃の事であろうと云う。

夫の和泉守橘道貞がありながら、云い寄る男達を次々に受入れてしもう我が身の救いを仏門に求める式部の心が切々と伝わって来る。しかし式部は救われたのであろうか、前記の清水氏はもう一首式部が、上人に送った歌を載せている、

「舟寄せん岸のしるべも知らずして
えも漕ぎ寄らぬ播磨潟かな」

女性の本性なのであろうか、又は平安女性の特質なのであろうか、仏法よりも男の胸が恋しい和泉式部なのであった。

○石宝殿（生石神社御神体）

物事を分かり易く手順良く説明する方法として「五W一H」と云う手法がある。日本語に置き変えると、一誰が、二何時、三何処で、四何を、五何故（どうして）、六どの様に（何んのために）となる。この六項目を満足させると立派なレポートが出来る。

この手法で「石宝殿」を考えると、播磨国風土記が大きなヒントになる、その部分を「日本古典文学大系」（岩波）から引いて見る、「池の原の南に作石（つくりいし）あり形屋（かたちや）の如し長（たが）二丈広（ひろさ）一丈五尺高さもかくの如し名を大石（おおいし）と云う、伝えて云えらく聖徳の王（おおきみ）の

御世、弓削の大連の造れる石なり」。これで一二三四の項目を満足するが、この記事には矛盾がある。弓削大連は物部守屋の事であるが聖徳の御世を聖徳太子摂政の時と考えると、守屋は五年以上も前に殺されている、どちらかが間違いである、このため五項と六項を考える必要がある、ヒントは似た構造物はないか、である、そこで田口会長が現場で説明された時、Kさんが発言されたと云う、奈良県橿原市の益田岩船がある、私しも見学したが石が花岡岩と云うのみで形は実に良く似て居る横倒れの所も同様である、しかし実は益田岩船も謎とされて居る。ところが益田岩船の前部（上部）の穴の周囲の形が同県明日香村の駅の西にある、岩屋山古墳とその西の牽午子塚古墳の露出部分に良く似て居るとの説がある、この連鎖は石宝殿を考える上での重要なヒントであるが、実は私しはこの両古墳を見て居ない。ここで白状すると、以上の文の大半は、岡山県の倉敷考古館々長、間壁先生御夫妻の多年の研究成果である「日本史の謎、石宝殿」と云う本を読んでの孫引きなのである（この本は福山市民図書館に一冊ある）。だがここで私しは先生の意に反する事も云って置かねばならない、それは外でもなく、この神社の伝承と、万葉集の中に収められた歌謡、

「大なむち少彦名のいましけむ
　しづの岩屋は幾代経ぬらむ」、

外の数首を無視する事が、出来かねる、と云う事である。この辺りはかつて物部一族の領地だった可能性がある、物部神道の惣家として、仏教勢力に対抗し、国造らしし大神の「鎮の岩屋」、墓ではない「石の宝殿」を考えた、としても無理はないと思えるのである。

風土記の記事も太子一生の事と考えれば矛盾はしない……。さてもう一つ、あの岩屋を引起したり、運搬したりする技術が、当時あったかどうか、である。私しはあったと思う、そのほうが夢があるから……。

一九九二、十月

城郭研究部会主催

中世を読む会

テーマ　～戦国武将の手紙を読む～
（時）十二月十八日（金）午後七時
（場所）福山市中央公民館2F和室
（会費）資料代百円
（問い合せ先）
出内博都　五五ー〇五三五

播磨路探訪の旅

岡本　貞子

晴天に恵まれた十月十日の早朝。風も爽やかな秋晴れである。これからの旅行を予見するような、うれしい笑顔が並んでいる。

永富家の豪荘な建築と、庭園を眺望のあと、お手伝いさんが二階に昇る急勾配の階段が、胸を突いて思いが去らなかった。赤とんぼ荘浴室の中から見る月、今宵は中秋十五夜、山々、木々の陰影、その中を行き交う車のライト、すべて美しい墨絵である。淡い照明の浴槽に吾が身を委ねると、白い肌が温って次第に、ピンク色に染まる。透明度の高いお湯だった。美しい自然を前に、常とは違った私の営みがあるようで上気する。ホテルのスリッパのまゝ山上へ。酔に火照る身体に、萩、薄の上を吹き渡って来る夜風の心地よさ。展望台での月見、「明月や恋しきまでに人を恋う」そのあと603号室廊下での句座、これは逸品で魅力的だった。

翌朝、書写山へ、その規模の大きさに驚いて見上げる。段場山古墳に立つと忽ち五世紀にタイムスリップ。角髪（みずら）の彼を連想する。石の宝殿に向っては、さまざまな謎を問いかけた。

会長並びに旅行委員の皆様、よい企画、よい旅を贈って下さって、本当に有難うございました。

播磨路歴史探訪の旅の思い出

赤松　雅子

女中部屋　のぼる梯子の
急勾配　ねーやの齢は　十三
十四

七月が　二度あるという
珍しき　暦を見たり　大庄屋にて

父思う　太子の像は
神々し　七日七夜の行をなされり

合掌し　見送る僧の
清々し　太子町なる　斑鳩の寺

満月と　鈴虫の声
美しき　龍野の夜の　揖保川の
ほとり

あな不思議　あな面白や
生石（おいし）の　鎮（しず）の石室（いわや）は　永遠のなぞ

平成四年十月記

神石郡三和町の史跡巡り

中島　政子

窯跡に須恵器のかけら吾亦紅
絵馬堂の幽きに遊ぶちちろ虫
赤蜻蛉湧く山頂の郭跡
鳥渡る真下の谷に村一つ
岩屋会下谷の五輪塔群
山の日の釣瓶落しに五輪塔
女郎花はるかに昼の月かかる
中津藩代官跡に蔦からむ
写経の筆きれいに洗ひ秋彼岸

播磨路探訪の旅

書写山
ゴンドラを出て風やはらかに
秋ざくら
水引草山の裾より風来たる
摩尼殿の舞台造りや実南天
永富家
スラックス同志とり合ふ草風
壇場山
身に入むや壇場山の石棺
墳丘の濠に日の落つ曼珠沙華
赤とんぼ荘
名月や露風の丘に立ちをれば
朝の尾根火の粉のごとく鳥渡る
萩肩に日のぬくもりし水子仏

入会にあたって

平田　恵彦

新入会の平田と申します。六月下旬、十九年間の東京生活（いつの間にか福山にいた年月より長くなっていました）を終え、福山にUターンいたしました。久し振りの福山は、色々な意味で、かなり変わっていました。しかし、変わらぬ何かもあるだろうと考え、郷土史を勉強しようと思い立ちました。

いろいろな書物をひもとくうち、郷土のことについて本当に何も知らないことを思い知らされました。恥をいうようですが、水野勝成公の事蹟など、観光ガイドに載っているようなことさえも知らなかったのです。ですから、まず基本からスタートしようと、本を読むと同時に、福山近辺の有名な歴史関係の施設や遺跡を見て回ることにしました。なにしろ失業中ですので、時間だけはたっぷりとあるのです。

そんななか九月に、真備町の「まきび記念館」に行ってまいりました。受付に品のよい年配の女性が座っておられ、私の的外れな質問にも、親切に、そして丁寧に答えて下さいました。本当に真備町を誇りに思い、大切に思っていらっしゃるように感じられました。あとで資料を見て分かったのですが、真備町の歴史施設の管理や案内は、ほとんど地元の人々のボランティアによっているということでした。私はそのとき感銘を受け、福山は、故郷というものは、こうあってほしいと思いました。

ところで、福山市三の丸町に「県民文化センターふくやま」という施設があります。ここに「文化情報コーナー」という一室があり、広島県や岡山県を中心とした様々な文化情報が集められています（備後叢書や福山市史など歴史資料もあります。図書館と違い、煙草を吸いながら読んだり、雑談してもかまわないので、気軽で便利です。今のところ利用者が少ないのでなかなかいいですよ）。

ある日ここで山城志の一〇集、十一集を見つけました。読むと力作論文がそろっています。なかでも七森氏の「備南の珍石Ⅱ」が面白く、会って話が聞ければいいなと思いました。発行元を見ると「備陽史探訪の会」でした。ああ、この会なら、と思い当たりました。会長の田口義之氏が情報紙「福山リビング」に毎週「備後ゆかりの歴史人物」というコラムを連載していたからです。

はじめ私は、歴史コラムをかくほどだから、田口氏が年配の方ではないかと想像していました。ところが、すぐその後のコラムで「昭和三〇年生まれの私は……」という文脈に出会ったのです。ん？待てよ。その時、私の記憶の奥で何かチラチラするものがありました。会の連絡先は多治米町で田口氏の住所になっています。同じ年で昔から多治米町に住んでいるなら、私はこの人と城南中学校で同窓生になる。それどころか、三年の同級生に「たぐちよしゆき」という男がいたことを思い出したのです。早速、中学校の卒業アルバムを取り出して調べてみました。すると、「田口美之」という名前と懐かしい顔がありました。思い過ごしなのか、やはり別人なのだろうか。しかし、ペンネームということもある。住所を見ますと、ほんのわずか違っています。ただ、このあたりは以前は水田であったのが、現在では宅地化され、住居表示が変更されている可能性があります。

釈然としないまま、翌日再び「文化情報ルーム」に出かけました。そして、新たに「復刻版・備陽史探訪の会報一号～四五号」を発見しまし

た。これを最初から見ていきますと、史跡探訪の記念写真に、あの「田口美之」が写っているではありませんか。もう間違いありません。その夜電話をかけました。

私が名前をいうと、すぐ思い出してくれました。さらに、最近どこかで見かけたが、人違いかも知れない（太っていたからでしょう。中学時代の私は、痩せているほどではありませんが太ってはいませんでした）ので声をかけなかった、といいました。名前については「美」では軟弱なので「義」に変えたと教えてくれました。

しばらく昔話をしたあと、七森氏について聞きました。この人も研究内容から年配の人だと思っていたら、私よりも若い、しかも、これまた同窓生の弟だというので二度びっくりしました。やはり福山は狭いです。ともかく、九月二六日に初級者講座を中央公民館で開くので、その時に会おうということになりました。

そんなわけで、この日が私の入会記念日となりました。未熟者ですが、これからもよろしくお願いします。

〝備後〟雑感

種本　実

高校の修学旅行で東京に行った時、バスガイドさんが「福山というのは高い山ですか」、と私達に尋ねたことを覚えている。地名というのは住んでいる人には聞きなれた名前で特に意味を考えたりしないが、初めて聞く人にはいろんな想像やら想いを与えるものである。

最近、「日本海」は日本の覇権主義からくる名前だと韓国が異義を唱えているそうだ。なるほど、この海は日本の他、朝鮮半島、中国、ロシアなどにまたがっている。韓国では「東海」と呼んでいるそうだが、わが国にとっては「西の海」であるから、韓国名を受け入れるわけにはいかない。この海に限らず、国際的地名となると、色んな国の主張が有って難しいことが少なくないようだ。

新聞のローカル版は、福山近辺では「備後版」と呼ばれている。東は県境、西は三原から北は三次近辺迄がエリアとなっている。また、「備後中核都市」などと、「備後」という地名がかなり使われているが、この地名は現在の行政上の地名ではないことは、在地の人なら周知の通りである。

古代、大和朝廷下における「吉備の国」にあった「備前、備中、備後」各地方のうち、「備後」だけが広島県に属することになったが、なにか本家から分断されたような気がするのは考え過ぎかもしれない。それにしても、「美作、備前」というのは文字といい、発音といい美しい、それに比べ「備後」というのは「後」が付くことで、なにか落ちこぼれ的、最下位的な感じがする。古代の「備後の国」の勢力は、「吉備大国」にあってどのようなものであったのだろうか。想像を巡らすには浅学であるが、芦田川流域の古墳に先祖の生活史の一端を思い浮かべるのである。

放浪癖、というと大げさだがちょっと都会的雰囲気を味わいたくなると、岡山へ行くことにしている。JRで岡山駅構内に着くと、「備前岡山」のうららかな陽光が眩しい。桃太郎、吉備団子、マスカット、東西南北へ延びる支線など魅惑に富んでいて旅愁をそそる。

だが、広島県人であれば行政上、必然的に県庁所在地である「安芸の国広島」へ出向かねばならないこともある。ここは百万都市、中国地方第一の都市であるからさすがに大きい。福山が発展したといっても、広島から見れば東端の田舎である。

現市長さんは「五十万都市福山」をスローガンに掲げているが、人口が増えることが必ずしも発展ではないはずだ。市民同志のふれあい、心の交流が今ほど求められている時代はない。高年者が大切にされ、若者が定着できる街になって欲しいとせつに願う。

吉備の総社から、神辺まで第三セクターの鉄道が開通される日を楽しみにしている。広島の新交通システムのように華やかではないが、吉備を横断するこの路線は沿線住民ばかりでなく、ローカル線を愛するマニアにも喜ばれることは間違いない。これからも観光地ばかりでなく、忘れられた吉備の里を散策したいと思っている。

それにしても宮沢さん、笑顔もよいが性根を入れて政治改革を断行して下さいよ。郷土の私達はあなたの指導力に期待しているのですから。

動向

★田口会長は八月一日付で神辺町文化財保護委員の委嘱を受けられました。

秋深し

佐藤　秀子

好きな人だとか、遠い人を想う時、浮かぶのは笑顔です。瞼をとじて会いたいなあーとやさしい目を、口もとを、声を思いだす……。

以前、役員を長い間勤めて下さった高橋安子さんが七月十六日に亡くなられました。お葬式の時間を聞き違えて午前中に寺に着いてしまった私は、安子さんに、どこか面影の似ている叔母さんや従兄の方、そして、やはりお母さんそっくりの御姉弟にお会いして、再び安子さんに会えたような、なんともいえない気持になりました。心より御冥福をお祈りいたします。

十月から十一月にかけて岡山、今治、姫路へでかけ、美術館、博物館、文学館等をみてまわりました。岡山へは会員の矢田貝さんと岩下さんとで早朝出かけましたが、途中パンタグラフの故障という予期せぬ出来事。線路の上を歩くはめになり、ブツブツ文句を言いながらも何やら楽しいのです。後で考えてみると、一汽車遅らせたら、延々と待っていつ開通するかわからないわけで、ひょっとしてついていたのではないかと思ったりもしました。「山内家伝来の名宝」は初代一豊から、十五代豊信（容堂）までの多くの資料が展示されており、特に兜は形がとてもユニークで、唐人笠形、波頭形、伏鉢形、頭巾形、八角笠形、兎耳折形、蝶形（これはミッキーマウスに似ており、思わず三人でニヤニヤとしてしまった）と他にもたくさんあり、漆のこげ茶色がなめらかに城内のほの暗さの中で、四百年近く生きたことを誇っておりました。兎耳は相手の情報や戦況をよく知る為、伊太羅貝形兜は、戦さでかいがい（貝々）しく働く為と注釈がついており、酒落心を感じさせました。

数珠文散陣羽織…当時輸入品の真赤な羅紗地に、刺繍で水晶の数珠を斜めに大胆に配したデザインは、戦いに臨む武将の決意を表わしたようで、力強く奇抜（息子に言わせると少しかぶいているそうで）今日においても、通ずるものがあり、土佐人の気骨を感じました。歴代の藩主は絵や書にも優れており、特に九代豊雍の「関羽面像」は、本物の画家と比べても見劣りしない筆さばきで明快な線が素晴しいものでした。仏陀の生涯のレリーフ展、特別展「写実の美ー応挙とその周辺ー」をみて、三人で昼食をとったのは四時頃、急いで県立博物館の発掘展を回り、喉もとまで一杯になった古き香りと感動を福山まで持ち帰りました。

以前、応挙の屏風で、もみじが八枚ほどはらはらと散っている秋の絵を見ましたが、白い空間に絶妙に配された紅葉は、あたりに深い情感を漂わせ、ただ呆然と見とれてしまいました。

河野美術館は今治にあり市立美術館に近い性格をもったものです。たまたま山野草展がひらかれていて、安子さんを思いだしました。猿と亀と虎の絵が多く、絶妙の筆致でした。特に虎の眼は…　…二本の直線と一本の曲線でまるで生きている様。現実の虎の眼とは違うのに…とその技量には舌を巻くばかりです。

夕方五時出港のフェリーに乗り、お城の堀の澄んだ色や稲荷神社の鳥居の赤、鍛の浅葱や藍の糸のくすんだ色、目に残るそれらを思い浮かべながら熱いコーヒーを飲みました。

姫路も新幹線だと、すぐです。十月の一泊旅行で松岡五兄弟展のパンフレットをみた私は、現代陶芸の系譜も美術館でみようと二つの目的でやってきました。けれどこの他に、県立博物館の城郭展、好古園も見ることになり、帰りまで昼食はおろか、缶ジュース一本も飲めない有様となりました。

文学館は白と黒を基調とした大きな建物で入口の吉備の風土と歴史を説明したパネルは通路に沿って球形となり、ねぶたを模してありました。姫路出身の学者や政治家、作家の生いたちを記した年譜の前に立つとセンサーが感知して、演説や声が流れるようになっています。ほの暗い館内でひとり、亡き人の声を聞いていると、肉体の消滅後も残る書や作品をも含めて魂の不滅を感じました。

高名な作家達をおしのけて、私の心に深く移り住んだのは若い歌人でした。大学生の時に自殺した遺書が、そこにあったからです。服毒した後、「すぐ死ねるものと思ったのに死ねない。あたりをかたづけよう。少し散歩してこよう。まだ死ねない…」とここからは余白となり、死が忍び足で来たことを感じさせる強烈な現実を目のあたりにして、一瞬、私の心臓は止まりました。似た思いをした若い頃…青年の純な心情が支配する一隅の空間を私は、仲々立ち去ることができませんでした。

秋に次々と企画展が催されるのは

何故でしょうか。単に芸術の秋というキャッチフレーズでかたづけることはできないと思います。私達の心が夏の暑さと喧噪から解き放たれてしっかりと居すわった時、自然やものに対するやさしさや判断もでき、一つ年を重ねるお正月に向かって、精進できるのでしょう。私の好きな落葉も庭には、たくさん遊びに来、すみれや、ひようげ花（香川では時節はずれに咲く花をこう呼びます）のりんどやさつき、可愛いいものたちです。

三次の例会が決まった時、息子に「一緒にゆかない」と言いましたら、「母さん、俺は未来しか見てない。過去には興味はないんだよ。一人でどうぞ」と笑いながら一蹴されてしまいました。けれど洋一、母さんにもあと二十年くらいの未来はあるよ。

例会の時、私は勝手をして知人の家に寄らせてもらいました。若い頃作家志望の幼ななじみをなくして、ずーっと死の観念から離れられなかったのですが、ことあるごとに「生きていなければ、なんにもならない。生きていればこそだから」と言い続けてくれた人です。今頃、ようやくその意味がわかりかけてきました。会でたくさんの方から色々な知識や感動を教えて頂き、親しい知人が増えるにつれ、私は明かるくなってきた様な気がします。

まだまだ秋は待っててくれます。

「全国の博物館、美術館」の本年度版を先日買いました。

事務局日誌

八月二十二日第五回郷土史入門講座「福山の武将と山城」講師田口義之（参加二十六名）

同月二十四日役員会於ホーセン

九月六日　事務局会議於中央公民館

同月十三日バス例会「三和町の史跡めぐり」講師出内博都・馬屋原亨（参加五十四名）

同月二十六日第六回郷土史入門講座「水野氏の国人対策」講師立石定夫先生（参加三十名）

十月十・十一日一泊旅行「播磨路の旅」旅行委員神谷和孝・中村勤史・馬屋原亨（参加三十七名）

同月二十六日第七回郷土史入門講座「福山地方の信仰」講師神谷和孝（参加十五名）

十一月一日徒歩例会「杉原氏の拠点八尾山城跡と国府の名刹を訪ねて」講師田口義之（参加四十二名）

十一月十五日バス例会・秋の古墳めぐり「三次風土記の丘と備北の古墳を訪ねて」講師山口哲晶・網本善光（参加五十一名）

平成五年度会費の納入について

年度が改まりますので、来年度の会費を同封の振替用紙を用いて（現会書留でも可）納入して下さい。

（年会費）二五〇〇円

※夫婦会員四千円、親子会員三千円、子供会員千五百円

備陽史探訪の会
事務局
〒720 福山市多治米町
五ー一九ー八
TEL（0849）53ー6157

第八回郷土史入門講座・忘年会のご案内

平成四年度の締めくくりとして十二月二〇日（日）、左記の要項で第八回郷土史入門講座と忘年会を催します。

今回は当会々員で親と子の古墳めぐりでおなじみの篠原芳秀さんからスライドを交えて、最近の考古学的な成果についてお話いただく予定です。

第八回郷土史入門講座

テーマ「最近の発掘調査の成果」

講師　篠原芳秀氏

（時）十二月二〇日（日）

午後三時三〇分～五時三〇分

（場所）福山ワシントンホテル

二階五月の間（西）

※聴講無料、参加自由

平成四年度忘年会

（時）十二月二〇日（日）

午後六時より（講演終了後）

（場所）福山ワシントンホテル

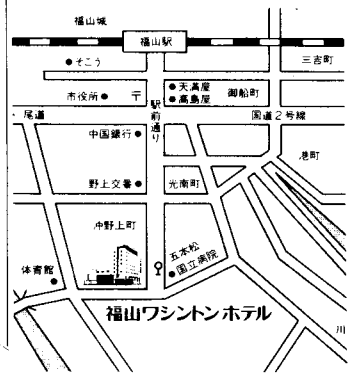
（会費）七千円

（参加申込）同封の返信用ハガキで出欠のご返事をお願いします。

締切は十二月十七日（必着）です。

※バス、電車でお越しの方は、ワシントンホテルより福山駅まで**送迎バス**がお迎えに参ります。

午後三時、福山駅北口キャッスルホテル前にご集合下さい。



福山市沖野上町5丁目27番11号
電話（0849）22－5511番